



こだま

横浜市立黒川小学校

学校報 NO.15

平成22年3月5日

今年度は、修了式が19日。翌日から4/4まで、16日間の春休みになります。子どもたちは、長い休みと春の訪れに開放的になり、行動範囲も広がることでしょう。でも、外は危険がいっぱい。雪消えとともに、道路を車がスピードを上げて走ったり、用水路や川の水が増えて流れが速くなったり。子どもが遊びに行くときは、どこで・いつまで遊ぶのか等を聞き、事故にあわないよう声かけをしていきたいものです。

さて、3月最後の全校集会での出来事。生徒指導主事が子どもたちの生活チェックをしたところ、朝食を食べてこなかった人はゼロでしたが、顔を洗ってこない人が1割もいました。朝の忙しい時間であっても身だしなみに気を遣い、歯磨き・洗顔・食事などを習慣付けたいと思いました。

平成21年度学校評価

今年度の評価がまとまりましたのでお知らせします。12月に児童や保護者のアンケートを参考にしながら、職員が具体的な目標の自己評価をしました。1月に学校関係者評価を実施し、その後、学校が今後に向けての改善策をまとめています。**○は学校コメントと(自己評価)**、**◇は学校関係者評価委員のコメントと(評価)**、

△は今後に向けての学校の改善策

1 話す、聞く、応じる活動を定着させる。

○「話す・聞く・応じる力」について毎月評価した。12月の段階ではほぼ達成している児童は、「話す」「聞く」「応じる」力とも80%以上になっている。どの学年も9月に比べて力が付いてきている。(B)

◇(B)

△伝え合う活動では、1往復半以上の伝え合いができるようにして、聞く力や応じる力を高めていく。個→集団→個という学習過程を意識した授業を実践し、伝え合いの場で練り合った考えをもう一度個に返して、自分の考えをまとめるようにする。

2 文章を書く活動を習慣付ける。

○子どもの書いた作文から変容を見た。書く内容が増えた、ひとつの事柄について詳しくかけるようになった、自分の気持ちや考えを書き表すことができるようになった、まとまりを意識した文章を書くことができるようになった等の変容が見られた。(B)

◇自分が体験したことが本物であるから、それを文章化することをもっと意識して指導していければいいと思う。(B)

△体験したことを書く活動は時間の確保に課題が残った。「何を書かせるのか」ポイントを絞った指導や書く技術を高めるための指導をしていく必要がある。また、体験が単なる活動で終わらず、気づきや驚き、発見、感動を伴ったものになるよう意識付けてやるような手立ても講じていく。さらに書いたものを公開したり、発信したりする活動の充実に取り組む。

3 暗唱目標80%を目指す。

○暗唱の達成率は95.2%で、子どもたちは意欲的に取り組んでいる。(A)

◇とらえ方の問題だが、この達成率は通過点で、できなかった子どもも、その後努力してできるようになったことを考えると、とてもいい結果である。これがベースとなって上記目標の1と2も伸びていく要素がある。期待できる。(A)

4 縦割班活動で協力し、助け合うことの大切さを実感できる児童

○リーダーを中心とした話し合いが活発に行われている状態とはまだ言えないが、行事以外でも休み時間等で遊ぶ姿が増えてきており、主体的で自然な形で異学年交流が深まってきたと言える。手紙の交流コーナーの設置

も活動の充実感に繋がっている。(B)

◇リーダーを6年生全員に体験させることはとても大事なことであり、中学校で生きてくる。本人もグループも成長する。6年生にとっていいことである。(A)

△児童会主体の集会等に縦割り班の活動を積極的に組み入れ、仲間意識を高めるとともに、6年生が中心となった話合いの回数を増やす。リーダーの役割がうまく果たせない児童には個別に助言し、自信をつけていけるように働きかける。

5 学校外交流で、コミュニケーション力や表現力を高める。

○他校交流が各学年とも進められ、交流が深められた。GT活用も積極的に行われ、体育や家庭科、総合、生活科等で効果を上げている。ふれあう人が固定化されず、多くの地域の方が来校しているので、よい刺激になるとともに、抵抗無く自然な形で自分を表現し、学習を進められるようになってきた。(A)

◇7月の中間評価が低いのは、時期的に未実施だったため。だとすれば、ここでは実施済みの学年だけの評価でもよかったのではないかと。(取組に対する評価なので…) (A)

6 地域の人や来校者に対し、場に応じたあいさつをすることができる。

○全校集会で役割演技を取り入れたあいさつ運動を数回実施したり、児童会でのあいさつ運動、標語作り等を実施したりして意識を高めてきた。職員や友達同士のあいさつはよいが、来校者へのあいさつは不十分。児童アンケートでは「誰にでも元気にあいさつをしている」に「そう思う」と回答した児童は全体の67%で、もっとあいさつをがんばらなければという自覚は見える。(B)

◇コミュニケーション能力の原点はあいさつである。子どもにあいさつさせる前に大人から子どもに声をかけることが大事。朝は子どもからあいさつすることが多い。すべて「みんなのやくそくノート」を使った指導をしようとするとう無理がある。これだけは…というのがあれば、より具体的になる。(B)

△職員から積極的に子どもに声をかけ、あいさつが自然にできるように促す。保護者にも生徒指導便り等で呼びかけ、大人が積極的、意図的に挨拶することの子どもへの効果を伝える。ソーシャルスキルについては各学年の実態を把握した上で、不足している力(もっと育てたい力)を明確にし、取り組むスキルを絞った計画を立てるようにする。道徳の時間や特別活動との関連を図り、効果的なスキルを実施する。

7 虫歯のない人85%以上をめざす。

○目標に近づいているが、冬休みに向けて、再度治療勧告をしたり、パンフレットを作成して配布したりして、治療を促す必要がある。(B)

◇(B)

△治療していない子どもに個別の歯磨き指導を行う。治療中の子ども2人については、完了するまでがんばるように励ます。新たに虫歯にならないように予防に力を入れる。

8 新体力テストの握力・長座体前屈・シャトルラン・立ち幅跳びを、昨年度の秋田県平均に近づける。

○シャトルランは伸びの傾向が見られる。業前のマラソンの効果はあった。ストレッチに取り組み始めてから柔軟性も伸びた学年があり、継続が力になることはわかった。握力は、成果が見えなかった。(B)

◇せっかく雪国に生まれたのだから、陸上や水泳のようにスキー部も全員参加にできないものか。グラウンドにコースを作って、まず授業で扱うようにしたらどうか。(B)

△継続することで力がつくので、長期にわたって子どもたちが取り組めるプログラムを考える。

9 悩んだり困ったりした時に先生に相談できる児童を90%に増やす。

○職員一人一人が、子どもたちに声をかけているが、目標には到達していない。今後も面談で悩みを引き出ししたり、努めて声をかけていく必要がある。(B)

◇困ったときに、親や友達など相談できる相手はそれぞれである。「先生に相談できる児童を90%に」という目標に無理があるのではないかと。(B)

△悩みや困っていることがあるか、また、もしあったら誰に相談するか、相談しやすい人はどんな人かなどのアンケートを来年度はとってみる。

10 研究主題に基づく授業研究を充実させ、授業力の向上を図る。

○1月以降の予定も含めて、全学年で実施できた。(A)

◇(A)

11 教科等において、地域の人材を積極的に活用する。

○1つの学年のみ、2回の実施で終わっているが、他は3回以上実施できており、内容も体育、家庭、総合と、多岐にわたることができた。(A)

◇実施の記録を見ても先生たちはよくやっているとと思う。(A)